

令和6年度 小平市立 小平第六小学校 学校評価報告書

学校教育目標 ①元気でじょうぶな子 ②よく考えてやりぬく子<重点目標>
③仲よくできる子 ④進んで働く子

目指す学校像(ビジョン)
【目指す学校像】 できる喜び、わかる楽しさを味わい、みんなの笑顔が輝く学校
【目指す児童・生徒像】 自分の思いや願いをもち、表現できる子供
【目指す教員像】 明るく愛情にあふれ、学び続ける教師

前年度までの学校経営上の成果と課題
〔成果〕児童が自ら課題解決に向けて学習する力、自らの考えを友達と表現し合うことで考えを深める力が高まった。
〔課題〕感染症対策を継続し、体力づくりに向けた校内の取り組み環境を整える。校内研究を通じ、一層の児童の表現力の向上を目指し、学びに向かう姿勢と自主学習の定着を確かなものにしていく。

	具体的方策	第1回評価		成果・課題・対策	第2回評価		学校関係者評価	成果・課題・次年度以降の対策
		取組評価	成果評価		取組評価	成果評価		
学力向上	教科担任制による教科の専門性を生かした授業作りを行い児童の学習意欲を高められるようにする。また、共に学ぶ楽しさを実感できるように小集団での学び合いを推進する。「朝トレ」を導入し、「話す・聞く」力を高めるための時間を全学年で取り入れる。	4	4	習熟度別指導担当の教員を中心に、算数タイム等、様々な取組を行う。個人差や学年差が見られるため、診断シートの結果や児童の実態及び姿勢を踏まえ、さらなる学力の向上・定着を図る。	4	4	ICTの活用は目的を重視してほしい。 ・パソコンを毎日持ち帰るのは煩わしい場合があり、宿題など活用場面が明確であるべき。 ・ICTによる効率的な教育を期待。 ・高学年になると図書の時間が減り、本を読む子と読まない子の差が広がる。 ・紙の本を楽しむ時間をもっと増やしてほしい。	学習支援ソフトの導入で、児童間での思考の流れの共有化を図ることで、児童の学習意欲を引き出し、理解を促すことには一定の効果が確認できた。ICTの活用の利点を生かし、今後は個別最適化した学習課題を提供することで、さらなる児童の学力の向上につなげていきたい。
	発達段階に応じ、反復学習の場面、調べ学習の場面、表現の場面、交流の場面等、活用の場面を意識した指導を工夫する。段階的に児童の情報活用能力の基礎を培い、学習の理解を深めていく。	3	3	学習意欲に関してはICTを活用し学習支援ソフトの導入やデジタルドリルの活用など、児童の意欲を高めるための具体的な研究成果を、日々の教育活動に生かす。家庭学習の仕方を教員間で共有し、学校として系統性をもった仕組みづくりを計画する。	4	4	ICTの活用に関しては、デジタルドリルの導入や、使ってみることを推進してきた。今後は、学習中に効果的に使用できる場面を考えたり、家庭学習の課題として発展的活用を模索したりするなど、学習の系統性を意識し、学習効果を高めるICTの導入を心がけていきたい。	
体力向上	体育指導の共有や業間体育の活用により、児童の体力の向上を図るとともに、指導改善に努める。また、ボールや長縄、竹馬、鉄棒などの運動環境を整え、運動の日常化を図る。体育専科を中心に、専門的知識を教職員に共有し合う。	4	4	中学校区との連携や、教科担任制での専門的な体育科指導を実施できた。児童の運動に対する意識が高まっただけでなく、指導について教職員間で情報を共有するきっかけとなった。	3	3	・運動習慣がある子とそうでない子の二極化が心配である。公平に機会を与えてほしい。	体育専科を中心に、種目の技能ポイントや指導方法を共有し、より専門的な指導を行うことができた。来年度は、さらに連携を密に図り、児童の運動の場など他学年の教員と共有し、円滑な授業運営を行っている。
	フットソロンやダンスソロン、体力アップ週間等の各種運動集会の内容を充実させ、児童に体を動かすことの心地よさを味わわせる。体操やなわ跳び、ダンスなどに児童自らが取り組む仕組みづくり、家庭での運動の習慣化を図る。	3	3	全校参加を呼びかけ、持久走月間の設定をした。全員が外で元気に体を動かす意識を高めるとともに、運動の楽しさを知り、習慣化させるきっかけとなった。	3	3	持久走週間などでは全校児童が全員参加で行い、運動習慣の定着を図ることができた。来年度の各種運動集会も原則全員参加で行っていく。また、なわ跳びや持久走では、学習カードを使い児童自らが意欲をもって取り組めるようにした。行間の活動を工夫し、運動の機会を拡充することで、個人間の運動習慣の差を埋めていきたい。	
健全育成(いじめ防止)	一人一人の良いところを認め合う学級環境を整えていく。毎月のいじめ実態調査や年3回のふれあい月間を通じ、組織的にいじめの未然防止、早期発見・解決に努める。ふれあい月間に合わせて「いじめ」についての授業を実施する。	4	4	毎月のいじめ調査シートの活用、ふれあい月間での取り組みなどを通じ、未然防止、早期発見・解決に努めることができた。生活指導学会で情報伝達をすることで、全校で対応することができた。	3	3	・外部機関や、地域と連携をとり、トラブルを起す子どもの親への伝達を徹底していくことが望ましいのではないかと。	毎月のいじめ調査を活用し、こまめに実態の把握と情報共有を行う。ふれあい月間では、「いじめ」についての授業を行い、児童に「いじめ」について考える機会とする。また、アンケート等を通して把握したいじめについては、いじめ対策委員会で対応について検討し学校の組織として対応していく。
	児童には毎月の生活朝会や安全指導を通して、規範意識を高め、自ら考えられるように指導していく。月2回程度の生活夕会を実施し、教員間の情報交換を行う。副担任制によって組織的に児童理解を図り、教育活動を進める。	4	4	六小スタンダードについて、改めて整理し共通認識が得られるように確認した。児童への指導では、テレビ放送を生かして月目標を伝えたり、安全指導の中で、全校で指導が必要な事例を伝えることができた。	3	3	児童の実態から、来年度は月目標とは別に、年間を通して「あいさつ」の指導に力を入れていく。さらに、校内での安全な通学方について全校で指導していく。生活指導学会では、各学級の児童の実態について全教職員で情報共有して組織として対応できるようにしていく。	
特色ある活動	年3回の小・中連携の日を活用し、二中学校区の重点項目について共通理解を図る。また、二中学校区共通プログラム「あいさつ運動」に中学校と連携して取り組み、児童に「地域でのあいさつ」を意識させる。	3	3	定期的な小中連携を実施した。教職員の連携強化を目指し、小中連携の日の情報交換で共通理解を図り、改善意見を生かしていくことで、進級へのスムーズな接続を目指していく。	3	3	・気持ちの良い挨拶をすることに課題を感じることが多い。学校をはじめ、地域でも意識を高める取り組みが大切である。	年3回の小中連携を通じて教職員の定期的な連携をとることは十分になされていると考えられる。進学を目前にした児童自身の期待感や将来への展望を拓くまでには至っていないので、その点でさらに方策を考えていく必要がある。また、地域で気持ちの良い挨拶を行うことへの課題を中学校とも共有し、その対策が講じられるように連携し対応にあたっていく。
	学校経営協議会と連携して、学校をより良くするために毎月の学校経営協議会で共通理解を図る。学習支援ボランティアやNPO法人・地域人材を活用し、指導の充実に努める。	3	3	広く地域からの意見を取り入れるように心がけるとともに、児童の学習活動様子を公開できるように、定期的な公開を実施していく。地域との理解と協力を得られるように指導の改善に生かしていく。	4	4	学校経営協議会と連携し、配慮が必要な児童や家庭への支援体制が整えられるように務めた。具体的には、六小PTA協賛で、保護者と地域と現場の教職員が、共に児童への声掛けやわかり方を学ぶ講演会を開催することができた。結果的に自校の様々な児童に対する教育への理解を促すことにつながっている。今後も、連携をとり意見を取り入れながら、教育活動に様々な協力を得られるように、より良い関係を築いていく。	
	食に関する年間計画に沿って、児童が本物と出合い様々な体験を通して、食の楽しさや大切さを感じ苦手な食品や料理を少なくしようと努力したり、「食」を大切にしようとする態度を育てる。	4	4	食育指導として、季節ごとの食文化を発信したり、体験したりする活動を定期的にに行った。「食」に対する興味関心を高めることを目指していく。	4	4	・月一回の給食指導で、旬の食材や食事のマナーなどについて理解を促し意識を高める取り組みを行っている。それにより、児童の食に対する意識が高まっていると感じる。	給食指導を定期的にも実施した。児童が食に対して興味関心を高めることができた。校内では、栄養士と常に連携をとり、食育に関する各学年の学習への取り組みをサポートするなど、充実した食育の学びの環境を整えた。今後も、食への意識を高め、より良い食習慣が定着するように、家庭や地域への協力をお願いしていく。
	学校公開に合わせて障がい理解教育の授業を行い、保護者への障がい理解を図る。年2回の特別支援教育研修と定期的なOJTを行うことで、特別支援教育の指導法や障がい理解の共有に努める。	4	4	学校公開では特に低学年の児童への障がい理解教育の授業を行い、児童・保護者双方への理解を進めることができた。教職員に対しても定期的なOJTを行いながら、理解を深めることができた。今後もより多角的な内容の研修を重ねていくよう時間を確保していくことが課題である。	4	4	学校公開や校内研究授業で、全学年に障がい理解教育を実施した。児童自身が他者理解の視点を養うきっかけづくりにできた。今後は、児童が身に付けた視点を生かし、日常生活の中で実践できるような取り組みを促して、校内全体で児童を見守っていく仕組みづくりに取り組んでいきたい。	
業務のICT化により短縮できた時間を児童と向き合う時間に充て、教育活動の充実を図る。各種通信をスクールメールに添付して配信する。学校ホームページの更新を従来の学年・学級だよりとしていく。家庭からの欠席連絡やアンケート等はフォームを活用する。	4	4	学習者用端末を活用し校内での会議の資料を共有したり、お便りに代わる情報発信を学校HPやメール配信を行ったり、積極的なICT活用を試みた。勤務時間内の業務設定を原則として、業務の効率化と時間の確保を目指した。	4	4	・管理職主導で勤務時間の意識を高め、啓発を進めてきたことにより、従来の業務の見直しとより効率化を高める取り組みが進んでいる。	ICT化の推進は、業務の効率化につながった。今後も、分掌業務だけでなく、より良い教材の共有などを進めていくことで、学習準備の負担の省力化を図ってきたい。ICT化していくことで得られたメリットについて、教職員間で共有し、さらなる効果的な活用を検討していきたい。	